

19世紀アメリカ女性作家における書くことの自己探求

羽澄 直子

Seeking Oneself While Writing : American Women Writers in the 19th Century

Naoko HAZUMI

I

のちの批評家たちから「アメリカン・ルネッサンス期」と呼ばれることになる19世紀中旬のアメリカは、ラルフ・ウォルド・エマソン (Ralph Waldo Emerson)、ヘンリー・デイヴィッド・ソロー (Henry David Thoreau)、ナサニエル・ホーソーン (Nathaniel Hawthorne) といったアメリカを代表する男性思想家、作家たちが、イギリスやヨーロッパとは異なるアメリカ独自の思想や文学を模索していった時代であった。同時にこの時代は、いわゆる「正統な」文学史からは長い間葬り去られてきた、物書きを生業とする女性が台頭した時期でもあった。教育の普及、印刷技術の向上、交通網の発達により雑誌などの読者層が広がり、その新しい読者層の多くを占めていた中産階級の女性向きの作品が求められるようになった結果、女性読者向き作品の書き手としての女性作家が必要とされたからである。1850年のベストセラー『広い、広い世界』(*The Wide, Wide World*)を書いたスーザン・ウォーナー (Susan Warner)、E. D. E. N. サウスワース (Southworth)、マライア・カミンズ (Maria Cummins)、メアリ・ジェイン・ホームズ (Mary Jane Holmes)、ファニー・ファーン (Fanny Fern) といった女性作家の売れ行きと人気に対しては、同時代の男性作家からは嫉妬の声があがるほどであった。¹

しかし当時の女性作家の立場は複雑であった。彼女たちの多くは家計を支えるために執筆し、職業作家としてのプロ意識を持つようになる一方、「女性の居場所は夫と子どもに囲まれた家庭」という、当時の中産階級の女性に課せられた伝統的役割も果たさねばならなかった。本来ならば家族を養うべき父や夫の代わりに生活費を稼ぎ、実質「家長」の重責を担っていたにもかかわらず、世間的、表向きの家長はやはり父や夫であった。彼女たちは権威者たる父や夫の支配下に置かれ、家父長制の規範から自由になることは容易ではなかった。女性が世に出て商業的成功を納めることを「世間体が悪い」とみなす風潮もなかったわけではない。そのため女性作家の多くは、一時的にせよ正体を明かさず匿名または変名で作品を書くことを選んでいる。² 執筆で扱うテーマも「女らしく、家庭的」で啓蒙的なものに限定されることが多かった (Baym 291)。

このような葛藤を抱えながら仕事をしていた女性作家の執筆姿勢は、男性作家の姿勢とは当然違ってきただけである。男性がものを考え、書くことに対する社会規範の制約は、あったとしても女性に比べれば微々たるものではなかったか。彼らが自らの主義主張や信念に基づき「純粋な」執筆活動をすることはさほど困難ではなかっただろう。高邁な思想のため、社会貢献の

ためといった大義名分があれば、たとえ執筆活動がお金にならず、家計が破綻して家長の責務を果たせなかったとしても、世俗的なことは妻や娘にまかせ、彼女たちに献身的に支えられて（それが家庭の天使たる女性の役割である）、家長の体面を保つことはできたであろう。それに対して、例えば家族の面倒をみながら生活のために生涯書き続けたルイザ・メイ・オルコット (Louisa May Alcott) は、「明日の生活費を心配しながらせわしなく移動し、四六時中仕事や家族に縛られ、執筆活動にも没頭できない」(福田 27) という極めて日常的、現実的な状況で作品を生み出していたのであった。

執筆は中産階級の女性にとって、比較的簡単に収入が得られる手段であった。特に資本はいらず、紙とペンがあればよい。懸賞小説で選ばれば賞金が手に入る。内容が認められれば採用され、原稿料もあがる。筆者の性別や年齢に左右されない市場原理が働く場であった。それでも多くの女性職業作家は執筆に際し、世間の目を意識し、正当な執筆理由を数え上げ、どのように「女性らしさ」との折り合いをつけたらよいのか悩まねばならなかった。しかしその悩みゆえ、執筆活動は彼女たちに、自己と向き合う絶好の機会を与えたのである。彼女たちの作品はしばしば、社会の規制と自己意識のせめぎあいが投影される作者の自己探究の場ともなっている。本稿では、19世紀中旬のアメリカを代表する女性作家で、執筆の葛藤を日記等に吐露していたルイザ・メイ・オルコットを取り上げ、彼女の作品の中でヒロインたちが社会規範と自己意識のバランスを探りながら自分の生き方を模索していくさまを検証していきたい。

II

書くことはオルコットにとって、幼い頃からごく自然な日常の行為であり、楽しみであった。両親は自分たちの日記をつけており、娘たちにもそれを奨励した。それぞれの日記は家族の中で公表され、互いの意見が書き込まれた (Graves 7)。オルコット家の娘たちは学校へはほとんど通わず、教育者であり超絶主義の哲学者でもあった父やその友人から学んでいた。当時近所に住んでいたエマソンに本を借り、教えるを受けることもあった。日記をつけることは娘たちにとって、読み書きの大切な訓練の場であった。オルコットの日記には自作の詩が何編かしたためられている。おそらく家族から批評や添削を受けながら詩作を続けた結果、1851年にはフローラ・フェアフィールド (Flora Fairfield) の名前で初めて詩が雑誌に掲載されることとなる。

少女時代のオルコットの日記は、1843年から47年、10歳から15歳の多感な時期に書かれたものがわずかに残されているのみである。家族のプライバシーを重んじたオルコットは後年、古い日記の大部分を破棄している (Graves 7)。現存する1843年の日記が書かれた当時、オルコット一家はマサチューセッツ州ハーバードの近くにある、フルートランズという理想の共同体を目指す実験的な農場で暮らしていた。共同体のメンバーは毎日決められたスケジュールに従って労働をしていた。オルコット姉妹も家事の手伝いや勉強、運動などの時間が決められていた。日記には早起き (4時起床) して身だしなみを整え、朝食をとり、皿洗いなどの後片付けをすませ、勉強し、午後からはベリー摘みやハイキングなど戸外で活動するという、規則正しい生活が記録されている。アイロンがけや縫い物、洗濯も子どもたちの仕事であった。夜は友人宅へ行って歌ったりお芝居をしたり詩を読むなど、近所づきあいは盛んであった。不自由の多い厳しい生活ではあったが、子どもたちが家族そろっての活動を楽しんでいたことが、オルコットの日記からはうかがえる。

日記には自分の感情と格闘する少女の姿も写しだされる。自分の欠点が“impatience” (*Journals* 44)、“my bad temper” (*Journals* 47)であることを10歳の彼女は自覚している。1843年9月1日と24日の日記には、昼間かんしゃくをおこし、夜になってそれを悔いてベッドの中で泣き、もっといい子になろうと決意したことが書かれ (*Journals* 45)、さらに1845年の水曜日 (月日は不明) の日記には、「生まれてきたことを後悔するほど腹を立てている」 (*Journals* 55) と記されている。大人になってこの日記を読み返したオルコットは、1843年9月24日の余白に「50歳になっても同じことを言っています」 (*Journals* 45) と書き加えている。このように日記にいらだちをぶつける娘を母は見守り、勇気づけるコメントを娘の日記に書き込む。

あなたの字はどんどん上手になりますね。骨折りを惜しまず、そしてあせらないように。私たちが話し合ったことやあなたが考えていることをもう一度よく見直して下さい。そうすれば自分の気持ちや表現したり、自分のことがわかるようになると思います。日記はあなたの分身なのです。純粋な考えとよい行いについて記録しなさい。そしてあなたを愛する母の本当のかわいい娘になって下さい。

(*Journals* 47)

「困ったことがあればいつでも私のところへいらっしゃい」 (*Journals* 55) と書いて、要所所で娘を励ます母は、職業あつせん所を経営するなど、理想主義の夫に代わって生活費を稼ぐたくましい女性であり、娘のよき理解者であった。

成人してからのオルコットの日記は、少女時代と違って家族の中で読まれることを前提とはしていないようだ。日常生活の記録であり、かつ感情の吐露の場であることに変わりはないが、目を引くのは、自分の稼ぎや家計の収支に関する記録の多さである。これはオルコットが母と共に家計を担う責任を負うようになったことを示している。最初の詩集『花物語』 (*Flower Fables*) が出版された1854年以降の日記には、どの雑誌、編集者に、どの作品がいくらで売れたかという記録が細かく記されている。ただし1860年代初頭から本格的に書き始めた匿名あるいは変名での煽情小説に関しては、批判を恐れて父やその仲間には内緒で書いていたため、日記への記録も慎重である。たとえばA.M.バーナード (A.M. Barnard) 名義で雑誌に掲載され、作者の死後一世紀近く立ってからオルコット作として公表され話題となった煽情小説『仮面の陰で』 (“Behind the Mask,” 1866) については、1866年11月の日記の収支記録の中に紛れ込ませるような形で、“Behind A Mask.80” (*Journals* 154) と記されているのみである。

それでも日記からは、煽情小説執筆に対するオルコットの心境をうかがい知ることができる。たとえば1865年2月、後に『仕事』 (*Work*, 1873) という題名で出版される小説を書くのにいきづまったオルコットは、「それ『仕事』を放り出し、またがらくた文書きに戻った。その方が高く売れるし、(よい作品を書いて) 誉められても飢えるわけにはいかない。センセーショナルな物語なら半分の時間で書いて、家族の生活も楽になる」 (*Journals* 139) とつぶっている。実際に、日記にこう記す前に完成させた「大理石の女」 (“A Marble Woman”) という作品で、彼女は75ドルの稿料を得て、「薪や石炭、小麦粉、服を買って生活を快適にした」 (*Journals* 139) のである。

自虐的ともとれる記述であるが、オルコットが煽情小説に着手したのは、金銭的な理由からだけではない。彼女は1862年の日記に、そのような作品の執筆を楽しんでいること、「私の書くものはくだらないけれど悪くはない・・・(煽情的な物語を書くことは) 想像力と言葉の訓練に

なと思う」(*Journals* 109)と書き残している。また友人に対しては、自分の生来の好みは煽情小説のような毒々しいものであると打ち明けている(qtd.in Stern 192)。彼女は父や母を尊敬し、自分の属するコミュニティを愛していたが、一方で常に父や母の賢くかわいい娘であることを期待されるのは重荷でもあった。中産階級の女性を縛る規範や道徳を打ちこわすような煽情的な物語を創作することは、彼女の内にたぎる情熱や、ストレスのはけ口となったのである。

III

執筆するオルcottの姿が最も色濃く投影されているのが、『若草物語』(*Little Women*, 1868)のジョー・マーチである。今も読みつがれているこの四姉妹の物語は、自分の家族をモデルにしたもので、次女ジョーは活発でかんしゃく持ち、書くことが大好きな少女として描かれる。父親が不在がちなマーチ家を支えるのは自分の責任だと考えるジョーは、投稿した作品で賞金を獲得し、得意の創作で家族の生活を楽しめる幸福をかみしめる。これはオルcott自身の体験と重なるものである。しかしジョーは、編集者や読者が望む「売れる」物語が、必ずしも自分にふさわしいものや自分が書きたいものとは一致しないことに気づき始める。

ジョーが主に生活の糧に書いていたのは、荒唐無稽な通俗小説のたぐいだった。彼女の稼ぎで一家は肉や雑貨を買ったり、病気の妹ベスの転地療養の費用をまかなうことができたのであるが、父は「お前にはもっといいものが書けるはずだ。お金のことは考えずにもっと高いところを目指しなさい」(*Little Women* 268)と苦言を呈する。ニューヨークで一人暮らしを始めると、ジョーは父には内緒で、さらに刺激の強い作品を匿名で書くようになる。愛する家族のために書いているという大義名分で罪悪感を打ち消しつつ、彼女は想像力をふくらませながら煽情的な世界にひたることを楽しんでた。

オルcottはおそらく世間の良識をおもんばかり、自分が煽情小説を書いていたことを生涯隠し通したが、執筆自体を恥じてはいなかった。抑圧された自己を解放する手段として、煽情小説執筆は彼女にとっていわば必要悪だったからである。しかし少女向け小説である『若草物語』でジョーの行為を擁護することは、倫理的には難しいと考えたのであろう。空想とはいえ人生の暗黒面に漬かって執筆するジョーを、オルcottは「女性の性質の中でもっとも女性らしい徳を無意識に汚し」「本来の自分に咲いていた清らかさを払い落としてしまった」(*Little Women* 349)と断罪する。さらにのちにジョーの夫となる、歳の離れたドイツ人教師ベアに、煽情小説は読者にも作者にも悪い影響を及ぼすと非難させる。より過激なものを求めて目がくらんだ自分を恥じたジョーは原稿を焼き、スキャンダラスな作品と決別する。その後小説の中でジョーの書いたものが金銭的利益をもたらすことはない。マーチ叔母から屋敷を相続したジョーは経済的基盤を確保し、夫の夢を手助けして学校を設立する。

19世紀半ばのアメリカ中産階級の娘たちが目指すべき最終ゴールは、よい伴侶を見つけて健全な家庭を築くことであった。オルcott自身は生涯独身で、職業作家として名声を得ていたし、結婚についてはエッセー「幸福な女性」(“Happy Women”)の中で、「自由、幸福、自尊を犠牲にするもの」と痛烈に批判し、「オールドメイド」と呼ばれることを恐れるのは「ばかげた偏見」であり、結婚しなくても女性は十分幸福になれると主張している(203)。作者と世間の規範のずれは、姉妹の母マーチ夫人の結婚観に反映されている。母は娘たちに「善良な男性に愛され選ばれることが女性にとって何よりの幸せ」(*Little Women* 97)という常識的な忠告

をする一方、「不幸な妻や結婚相手を求めて騒ぎ回る乙女らしくない娘になるぐらいなら、幸福なオールドメイドになる方がよい」(*Little Women* 98) という、当時の母親としては大胆な意見も述べる。しかし『若草物語』第一部が出版された時、読者の一番の関心はマーチ家の姉妹たちが誰と結婚するのかという点だった。読者の声に押され、オルコットは第二部でしぶしぶ彼女たちを結婚させる (Delamar 89)。自由で快活な職業婦人になりたかったジョーは、父と未来の夫に非難されて執筆を断念し、社会の良識が望む「幸福な家庭婦人」にならざるを得なかったのである。

IV

ジョーが執筆するオルcottの分身ならば、働く女性としてのオルcottの分身が、『仕事』のヒロイン、クリスティ・デヴオンである。前述の「幸福な女性」でオルcottは、自分の信念を通して自活し、女性同士の強い絆に支えられた幸福で魅力的な4人の未婚女性を紹介しているが、クリスティのあゆみはまさにこのような生き方—結婚以外の意義ある人生—を目指すものとして描かれる。

独立心旺盛な20歳のクリスティは、農村の叔父の家を飛び出し、自立とやりがいのある仕事を求めて単身ボストンに出る。彼女が試みた仕事は住み込みの家事労働、女優、家庭教師、話し相手、工房でのお針子で、同じ年頃のオルcottがすべて体験した仕事である。他人に使われて働くことはクリスティが想像するよりも苦労が多く、中には自尊心をしまいこまなくては勤まらなと感じられる仕事もあったが、これらはみな19世紀半ばのアメリカで「若い女性が都会で得られる」(Kasson xii) ごく当たり前の職業であった。しかしどの仕事も学ぶことは多くても、自分の求める意義ある仕事ではないとクリスティは感じる。用意された既成の生き方には満足できず、新しい方向も見いだせない彼女は迷い苦しみ、職も自信も意欲も失っていく。

低迷期のクリスティを救ったのは、彼女には無縁だと思われていた恋愛と結婚だった。労働観の変化が彼女に結婚を選ばせたのである。独立独歩を求めて働いていた時、彼女にとって労働とは就業であり、経済的基盤をつくるためのものであった。したがって「自由、幸福、自尊を犠牲にする」結婚と労働は相いれず、両立は困難であった。しかし周囲の人びとに支えられて絶望と貧困を脱した時、クリスティは労働とは互いに助けあい、慈愛の気持ちで相手に奉仕することであると理解する。この新しい労働観に基づくのであれば、たとえ結婚が従属や犠牲をとまなうものであったとしても、価値ある行為とみなすことは可能である。

クリスティの決断は、既存の作品群からオルcottの結婚観を読み取ってきた者にとっては思いがけない方向転換であろうか。しかしこのあと作者は、結婚したクリスティを「幸福な家庭婦人」にはしないというひとひねりした展開を用意する。結婚とほぼ同時に夫は南北戦争に従軍し、クリスティも看護師として戦場へおもむく。彼女は別居結婚の状態で看護に励む。これは社会に役立つやりがいのある仕事で、彼女の新しい労働観に合致するものであった。戦時ならではの変則的で充実した結婚生活を送る彼女の姿には、作者のしたたかな策略を見いだすことができるだろう。社会規範に逆らわずヒロインを結婚させたとみせかけて、南北戦争という非常時を利用し彼女を無理なく主婦業の縛りから解放し、理想の仕事も見つけさせたのだから。

終戦後のクリスティにはさらに、結婚以外の意義ある人生を探索するための最上の条件が与えられる。夫の戦死と娘の誕生、夫の年金と叔父の遺産による経済的基盤、支えあう女性の仲

間たち、そして女性の地位向上のための社会改革運動という「天職」を見いだした彼女は、もはや男性に依存する必要はない。母であり、未亡人であるという立場で発言をしようとする彼女には、結婚の必要もない。こうしてクリスティは、「幸福な女性」を体現できる人物として、女性参政権を求め社会活動に熱心だったオルコットに夢を託される理想の女性像となるのである。

『若草物語』のジョーは、世間の意見に半ば屈する形で生き方を修正させられた。約5年後に大幅な加筆修正をして出版された『仕事』のクリスティは、社会規範とうまく折り合いながら自己実現を果たす方法を選んだ。これを作者の妥協ととるか、成熟ととるかは解釈の分かれるところであろう。

本論文は名古屋女子大学平成17年度特別研究助成費による研究成果の一部である。

注

1. 例えばホーソーが同世代の女性作家たちを「いまましい物書き女ども」と罵倒する手紙が残されている。
2. 女性作家の匿名については、拙論「隠されたスリラーの秘かな楽しみ」（『名古屋女子大学紀要人文社会編』第50号 pp.237-244）で論じられている。

参考文献

- Alcott, Louisa May. "Happy Women." 1863. *Alternative Alcott*. Ed. Elain Showalter. New Brunswick: Rutgers UP, 1997. 203-06.
- . *The Journals of Louisa May Alcott*. Eds. Joel Myerson and Daniel Shealy with Madeleine Stern. Athens: U of Georgia P, 1989.
- . *Little Women*. 1868. New York: Penguin, 1989.
- . *Work: A Story of Experience*. 1873. New York: Penguin, 1994.
- Baym, Nina. *Women's Fiction: A Guide to Novels by and about Women in America, 1820-70*. Ithaca: Cornell UP, 1978.
- Delamar, Gloria T. *Louisa May Alcott and "Little Women"*. Lincoln: iUniverse. com. 2001.
- Graves, Kerry A., ed. *The Girlhood Diary of Louisa May Alcott, 1843-1846: Writings of a Young Author*. Mankato: Capstone P, 2001.
- Kasson, Joy S. Introduction. Alcott, *Work*. ix-xxxi.
- Shealy, Daniel, ed. *Alcott in Her Own Time*. Iowa City: U of Iowa P, 2005.
- Stern, Madeleine. *From Blood & Thunder to Hearth & Home*. Boston: Northeastern UP, 1998.
- 福田敬子「屋根裏部屋から陽の当たる場所へ」高田賢一編著『若草物語』ミネルヴァ書房 2006年。19-28。